

利便性と尊厳のバランスが要 見守りシステム活用術



エコナビスタ
代表取締役社長
渡邊君人氏



公益財団法人
テクノエイド協会
企画部長 五島清国氏



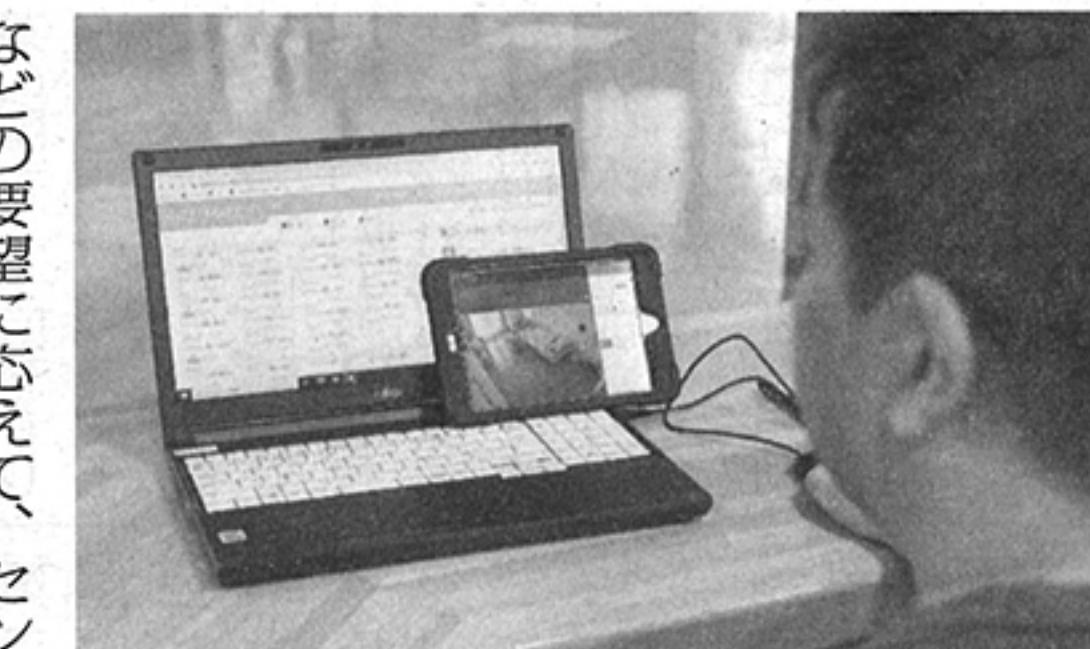
渡邊 以前はセンサーが単一の機能として動作しており、連動して通知するようなものではなかった。スタッフはPHS、スマートフォンなど複数のデジタルガジェットを持つ必要があり、使い勝手が良いものではなかった。当社では、ユーザーから「トイレの様子を把握したい」「記録システムと連携して欲しい」とい

うに、単純な見守り支援機器と違うものになってきていた。

五島 当初はマットを敷いて徘徊を検知するタイプだったが、今では生活全般を見守ることが、今ではできるようになった。

五島

—見守りシステムは時代の流れとともに変化している。五島 当初はマットを敷いて徘徊を検知するタイプだったが、今では生活全般を見守ることが、今ではできるようになった。五島 利用者の生活をデータとして記録することが求められる中で、効率的に介護ができる使い勝手の良い商品がここ数年で出てきている。また徘徊・転倒予防とは違う使い方をしている施設も増えていく。入居者の情報を1つのプラットフォームに集約されることで、今まで把握できなかつたことが可視化できるようになり、単純な見守り支援



◆施設のニーズにあった見守りシステム導入が進んでいる

要だと考えている。

五島 介護ロボットを使用することが目的ではない。利用者ごとの課題、サービス提供のために把握したいことなど、課題解決のために使用するものだ。スタッフと利用者の間にテクノロジーが入ってきたときに、利用者の生活様式がどのように変化するのかを捉える必要がある。利用者の身体機能を長期的に見て、式がどのように変化するのかを捉える必要がある。利用者寄り添いながらできることを、利用者の視点になって選定するべきだと思う。

五島 介護ロボットを使用するためには、利用者の課題、サービス提供のために把握したいことなど、課題解決のために使用するものだ。スタッフと利用者の間にテクノロジーが入って

とがある。見守りシステムは誤反応が発生する可能性もあるが、導入すれば稼働し、スタッフの負担が少ないこと

が、導入が急速に進んでいる

一因であると思う。

五島 センサーは即効果を体験することができる。適したセンサーを導入せずに誤反応ばかり発生してしまうと、現場も疲労しITを導入する機会がなくなってしまう可能性がある。だからこそ選定は慎重に行うべきだ。

五島 —データ活用における注意点は。

渡邊 見守りシステムの導入を上手く進めていくには、スタッフにとっての使いやすさだけでなく、利用者の尊厳を守るためにバランスを考慮する必要がある。利用者目線になつて考えることが必要だ。

五島 見守りシステムの導入はインフラ整備になるため、簡単に買い替えることができない。建物の状況なども踏ま

五島 センサーは、赤外線、ドップラーセンサー、加圧センサー、生体信号から心拍をセンシングするものなど多くの種類がある。「アクティブな利用者が多いので生活リズムを把握したい」「要介護度の高い利用者に使用したい」など、施設のニーズ、利用者の状況を考慮して選定する必要がある。選定の時点で誤つてしまふと効果の検証もできなくなる。

五島 見える化により、実際に勤務している夜勤者しか把握していないかったことがデータに活用していくか検討する必要がある。

五島 見える化により、実際に勤務している夜勤者しか把握していないかったことがデータに活用していくか検討する必要がある。見えないことを把握できることに対し、どのように増えるように感じるケースがある。見えないことを把握報が増えることになり、仕事が増えるように感じるケースがある。見えたときに対し、どのように増えるように感じるケースがある。

五島 見える化により、実際に勤務している夜勤者しか把握していないかったことがデータに活用していくか検討する必要がある。

負担軽減分を個別ケアに

渡邊 施設ごとにITリテラシーのレベルに違いがある。まずは1種類のセンサーを活用してスキルを上げてから、導入していくといふといふ二つもある。利用者の介護度が変化していく中で、トイレに行くことが難しくなったときにトイレセンサーを拡張するなど、状態に合わせて追加することができる。リテラシー

とがある。見守りシステムは誤反応が発生する可能性もあるが、導入すれば稼働し、スタッフの負担が少ないこと

が、導入が急速に進んでいる

一因であると思う。

渡邊 記録システムと見守りシステムを比較してみると、記録システムは自分たちで入力する必要があるため、使いこなすまでに時間を要するこ

とがある。見守りシステムは誤反応が発生する可能性もあるが、導入すれば稼働し、スタッフの負担が少ないこと

が、導入が急速に進んでいる

一因であると思う。

渡邊 記録システムと見守りシステムを比較してみると、記録システムは自分たちで入力する必要があるため、使いこなすまでに時間を要するこ

動量が多い利用者が入所している施設で活用されているのは、クオリティの高い生活情報を探りたいというニーズの現れだと考えられる。その中でも、富山県は医療・介護連携が進んでおり、サ高住でセンサーを上手く活用している事例が増えていている。病院と施設で医療情報を共有することで、質の高いケアの提供や、早い段階で医療機関に相談することもできている。

――見守りシステムの活用事例について。

者を減らすなどの人件費を削減することができるというメリットを、単なる人員削減効果とするのではなく、その分を日勤帯のシフトを1本増やし、より利用者への個別ケアの時間に充てるなどして、施設全体の質を上げるビジョンを持つて欲しい。

と疑心暗鬼になり中途半端になってしまふ。利用者全員の状況を把握する必要はなく、状態を把握する必要がある利用者もいれば、そうではない利用者もいるため、見守りシステムの業務の役割分担をするべきだ。眠りの深さや日の活動も点数化できるセンターもあるため、上手く活用することでケアの質向上にもつなげることができる。

12面からつづく



▲双方の立場から意見交換が交わされた

たときに通知することで、人間の経験則と併せて判断し、状態変化を予測するトリガーアルゴリズムになるだろう。人のトレーニングには限界があるため、AIが気づきを通知するさりげないアドバイスが、見守りシ

ケアプラン

状態変化を特定できるようになってくるだろう。

——データから利用者の状態変化を予測できる。

渡邊　スタッフが利用者の日常生活をタイムラインで把握できているため、病院とスマートな連携が取れている。利用者の状態を把握していることにより、緊急搬送で一命をとりとめたという事例が多くなった。

ケアプランに情報反映

システムの新しい形になるかも
しない。
——今後については。

▲モニターで利用者の状況を確認できる